

インドネシアで働く元交換留学生のライフストーリーに見る 留学評価

八若 壽美子*

Life Story Interview of Former Exchange Students who Work in Indonesia: How They Evaluate Their Study Abroad Experiences

Sumiko HACHIWAKA*

要旨

本研究では、日本の地方大学に交換留学をし、大学卒業後母国で働くインドネシア人元留学生3名を対象にライフストーリー・インタビューを行った。3名の語りから、調査時点での交換留学の評価、留学中及び留学後の日本語学習・使用と留学評価の関連に焦点をあてて、分析を行った。その結果、留学中の体験とその評価は、自身の性格、経済状況、出会った人々、大学の受入体制などのそれぞれが置かれた環境に影響を受けながら3人3様に展開していることがわかった。日本語専攻の3名にとって、交換留学は日本語の上達だけでなく、自信を得、視野を広げ、現在の仕事にも繋がる経験として高く評価され、さらに大学院留学という次のステップへの動機を提供する場にもなっていた。一方、3名の語りからは、経済的支援や来日時の諸手続き支援の課題や日本人の友人作りの難しさなど、日本側の受入体制の問題点も浮かび上がった。

【キーワード】 留学評価、交換留学生、インドネシア、日本語学習、ライフストーリー

1. はじめに

教育のグローバル化に伴い、留学生受入拡大のため多様な留学プログラムが実施されており、その成果について留学を終えた元留学生による検証が求められ、様々な視点から元留学生を対象とした調査・研究がなされている。有川 (2016) は、日本の大学・大学院に留学したインドネシア人を対象に、どのようなことが留学経験に関係し、影響したのかを20年に渡って調査し、教育人類学の立場から文化修得プロセスの解明を試み、留学政策、留学制度やその変化が留学生個人レベル

*茨城大学全学教育機構 (〒310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo, Mito-shi 310-8512 Japan)

の体験と相互に密接に関連していることを明らかにしている。田中 (2014) は、日本留学終了後日本でも出身国でもない第三国で生活する元留学生を対象とした聞き取り調査を行い、留学成果として専門性の深化、人間的成長や自信、他者からの評価が挙げられるとともに、留学後も国際経験が進展し、留学成果が国や地域の枠を超えて波及していることを指摘している。

日本語教育においては、近年「個」への関心の高まりから、個々の経験や内的世界に光をあてるライフストーリー研究¹⁾が注目され、日本語を学ぶことが留学生活やその後の人生においてどのような意義や影響を持つか、個々の語りを通時的、動態的に見ることによって、言語教育の意義を捉え直そうとする研究(川上 2011、三代 2009、佐藤 2013)がなされている。元留学生のライフストーリー研究では、池田・八若 (2016、2017) が留学評価と日本語学習の関連の解明を試みている。

池田・八若 (2016) では、日本の大学院修了後日本で就職した元留学生2名のライフストーリーから、コミュニティ参加への意思決定が主体的な学びへの転機となり、元留学生が多様なコミュニティ内での人との関わりから日本語を学び続けている過程を描出し、日本語習得が現在の良好な人間関係構築や肯定的な留学評価に関連していることを指摘している。池田・八若 (2017) は、日本の大学院修了後出身国の大学教員として働く元留学生のライフストーリーの分析を行っている。研究分野が日本と密接に関わっている文系元留学生は日本滞在経験そのものや日本語習得にも研究上の意義を見出し、留学終了後も日本語力向上に努めていた。一方、研究での使用言語が英語の理系元留学生は、短期間の日本語学習にも関わらず帰国後も日本語会話力を保持し、日本語使用が日本への愛着など留学の肯定的評価に繋がっていることが判明した。これらの研究から、関与の仕方は様々であるが、日本語学習や使用が肯定的な留学評価に関与していることが示唆された。

しかし、これまでの元留学生の留学評価に関する研究の多くは学位取得のための正規留学生を対象とするものであった。近年増加しつつある学位取得を目的としない短期留学の場合には元留学生はどのような意義を見出しているのだろうか。

本研究では、日本語専攻で日本の地方大学に約1年間の交換留学²⁾をし、大学卒業後出身国で働くインドネシア人3名にライフストーリー・インタビューを行い、1) 日本留学に対する評価、2) 留学中・留学後の日本語学習・使用と留学評価の関連の2点に焦点をあてて語りを分析し、交換留学の意義を探るとともに、語りから浮かび上がる留学生受入に関する課題を検討する。

2. 研究方法

2017年8月に、インドネシアで働く元交換留学生3名にライフストーリー・インタビューを行った。3名はインドネシアの大学で日本語を専攻し、在学中にそれぞれ異なる大学に約1年間の交換留学をした。インタビュー調査の依頼時に、「留学する前から現在に至るまでの生活やその時に考えていたことについて話してもらいたい」という教示とインタビュー項目³⁾を伝えておいた。インタビューは調査者と一対一で行い、項目に添って調査者が質問を加えながら自由に話してもらった。インタビューは協力者の了解を得て、ICレコーダーに録音し、文字化した。インタビューの内容の中から、上述の2点に関わる言及を中心に抽出し、時系列にまとめた。限られた紙面の中で、極力協力者の言葉をそのまま掲載するため、会話形式と引用を交えた要約の形式とを併用した。最小限ではあるが理解に支障があると思われる明らかな間違いはインタビュー協力者の了解を得て修正を加えた。また、個人や場所が特定されるような固有名詞は一般名詞や記号に変更した。

3. 語りと考察

本章では、各インタビュー協力者について、略歴を示し、その語りを「日本語学習及び留学のきっかけ」「留学中の生活」「人間関係」「交換留学生としての学習」「留学後の生活」「留学を振り返って」の項目に分けて提示した上で、それぞれの留学評価と日本語学習について考察を加えた。

3.1.1. インタビュー協力者 A さんの略歴

協力者 A さんはインドネシアの大学の日本語学科 4 年の時に留学を決め、約 1 年間交換留学をした。帰国後卒業論文執筆等で 1 年間大学に在籍し、卒業後約 2 年間現地の日系企業で働いている。交換留学の前に約 1 か月日本でのインターンシップを経験している。

3.1.2. A さんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

日本語学習のきっかけは、中学の時に日本の音楽が好きでその歌詞を理解したいと思ったことである。辞書を買って独学した。高校で科目として日本語を選択し学び始めたが、その内容はひらがな、カタカナ、基本文法程度であった。大学は高校の先生の勧めもあって日本語学科に入学した。4 年生の時協定校の A 大学への交換留学生 2 名の募集があったので応募し、選抜されて半年後の 10 月に私費で留学した。

《留学中の生活》

A さんは留学前に大学のプログラムで日本の企業で 1 か月のインターンシップを経験していたが、単身で来日するのは初めてであった。深夜に到着したため、次の日の 10 時に大学からの迎えが来るまで一人で空港で待つのは不安であった。最初に入った寮は大学から約 10 キロ離れたところで、交通費節約のための自転車通学は大変で、1 か月後に大学近くの寮に引っ越した。

日本語を勉強していたので言語についてはあまり不安はなかった。また、A 大学には 50 名近いインドネシア人が在籍していたので、安心だった。

留学前から最も不安だったのは、奨学金が得られなかったこともあって経済面であった。

*：⁴⁾ 留学前に何か不安だったこととか、ありましたか。

A： あ、する前。もちろん、お金ですね。でも、その時、先輩が日本にいてアドバイスをもらいました。大丈夫ですって、日本で、アルバイト。でも、日本に来て、アルバイト探すのは大変です。難しいです。

その後 A さんはいろいろなアルバイトを経験した。まず 1 月から新聞配達をやったが、慣れない寒さや雪の中の配達は大変で 3 か月でやめ、レストランで餃子・寿司作りやサービスなどのアルバイトをした。経済面での不安から、アルバイトのスケジュールを優先して授業をとったため、受けた授業がとれなかったのは残念だった。

秋に来日したため、寒くなっていく気候にも苦労した。雪を見た時は「最初ワイ、ワイという気持ち」で「大変うれしかった」が徐々に苦しい気持ちに変化していった。

しかし、留学前の期待と大きく違っていたのは日本人との交流であった。

*： 留学前に日本留学で期待していたこととか、留学ってこんなのかなというような期待がありましたか。

A： 留学する前には、日本人との交流ですね。日本人との交流は、もっと、もっと、やりやすいと思っていましたけど、でも、日本に来て日本人と交流はあまりできてないんですね。

《人間関係》

Aさんは最初に接する日本人であるチューターに恵まれなかった。

A： 友達はチューターがいい。一緒に旅行するとかしたり、一緒に部屋に。でも、私のチューターはちょっと、ちょっとです……。よくなかった。

A： 私、口座、銀行口座を開けるとか、自分で。寮を変えるのも自分で。だいたい自分でやりました。チューターはいるけど、いないみたいです。

その後チューターを替えてもらったが、そのチューターも4年生で就職活動などで忙しく、1回しか会えなかった。

日本人と友達になるのはさらに難しかった。

*： 日本人の友達はできにくかったんですね。

A： はい。だいたいできない。だいたいの日本人はヨーロッパ人と、友達になりたいかもしれませんがね。

*： 日本人と同じ授業はとらなかったんですか。

A： あ、とりました。あの、でも、授業だけ。

と述べているように、日本人学生とは授業で会うだけの関係から友人関係へとは発展させられなかった。「冷たい」という一般的な日本人の対人姿勢の印象は留学を通して強化される結果となった。

A： 留学する時、日本人も私に言いました。「日本人は冷たいですね」と言いました。だから、日本人はそんな感じが。そう思います。一般的に。そう思いますね。

一方、日本語教師である指導教員との関係は良好であった。留学中印象に残ったことは、送別会で指導教員からアドバイスや励ましの言葉もらったことである。

大学の外では、アルバイト先の人が仕事をする時話しかけてくれ、アルバイトを通して日本人の仕事の様子や仕事に対する態度を知ることができた。

同じ日本語の授業を受けている中国人と友達になった。また、モスクで地域に住んでいるバングラデシュ人やアフガニスタン人などと交流できた。

《交換留学生としての学修》

授業は日本語の授業を中心に日本文化や日本人学生と協働型の「日本の政治」などの授業をとった。日本語のクラスはプレースメントテストで5レベル中の上から2番目のクラスになった。学習内容は漢字以外は既に学んだことが多かったが、インドネシアの大学の教え方よりA大学の教え方のほうがいいと思った。インドネシアでは1クラス約30人だったが、日本は10人程度の小クラスだったのもよかった。

帰国後、日本語能力試験のN2にも合格し、会話スキルの上達も実感した。

A： 会話のチャンスも留学前に、日本語でしゃべるチャンスはなかった。なかなかなかったですね。留学中に日本語で、だいたい日本語でしゃべったり、話し合ったり、いろいろなこと、だいたい日本語でやりましたので、日本から帰ってから、少しだけ日本語の会話のスキルが上がりました。

勉学では、前述のようにアルバイトの予定を優先して取れない授業があったことを悔いている。

《留学後の生活》

帰国後1年間で卒業論文を仕上げ、卒業から調査時まで約2年間インドネシアで日系企業で働いており、「だいたい留学の経験とか、日本語も役に立ちました」と留学と今の仕事との関連を評価している。就職時に日本語のスキルや留学の証明書などが評価されたと思うし、日本語ができるから今の職を得られたと考えている。

A： 外国人との交流も好きなので、日本語、特に日本人とは交流、好きなので、日本語でいろいろなことをできて、ほんとによかったと思います。

勤めている日系企業では日本人はマネージャーだけで、日本語は使うが仕事以外ではあまり交流はない。報告書など専門用語は難しいが、使う日本語は限られている。「大学を卒業して日本語はあまり勉強していないので、日本語が退化している」と感じている。

実は、Aさんは教師になりたかったが、教師の給料は高くないので日系企業に就職することを選んだ。

A： 日本から帰って、私の夢は先生、先生になりたいと思いましたけど、通訳、日本の会社で通訳とスタッフとして仕事を始めてますので。でも先生になるのは夢。私、40代ぐらいに。

A： 今問題は給料ですね。インドネシアで先生の給料は大変厳しい。

また、進学したいという気持ちもあり、文部科学省のプログラムに応募したいとも考えている。私費での留学の大変さを経験したので、留学する機会が得られるなら奨学金を得て「勉強だけ集中して」したいと思っている。

《留学を振り返って》

留学中、自国とは異なる環境で独力でいろいろなことができたことは自信となった。

A： だいたい日本の生活が自分でできた。留学する前には自分でできないと思いましたけど、日本で自分で。自分でできるのは予想外ですね。

また、1年間の留学を以下のように評価している。

*： (日本留学についての) 評価、最後に聞かせていただきたい。

A： 評価ですね。だいたい私の生活にほんとに役に立ちます。経験とか、アルバイトの経験、日本の生活。苦しさ楽しさ。いろいろなこと、感じました。日本語、学べるのは日本語だけじゃなくて、生活のこともいっぱい学びました。(中略) 世界はインドネシアだけじゃなくて他のところもありますという感じだと思います。

3.1.3. Aさんの語りに関する考察

以上見てきたように、Aさんの留学生活は決して楽なものではなかったが、Aさんは苦勞も含めて留学中のすべての経験が現在の自分を支えていると高く評価している。交換留学を通して、困難を自力で克服したという自信、視野の拡大など日本語力の向上だけでなく多くのことを学んだという。1年という短い期間ではあるが、Aさんの人生にとってはかけがえのない時間となったことはまちがいない。

しかし、Aさんの語りからは受入側の問題もいくつか浮かび上がってくる。1つは留学前から懸念していた経済的な問題である。Aさんは日本では奨学金がなくてもアルバイトをすれば生活できると聞いていたが、短期滞在の交換留学生にとってアルバイト探しは難しかった上、生活を支えるためにはアルバイト優先の生活をせざるを得ない状況に陥った。そのため、取りたい授業が十分に取れず、後悔が残る結果となった。経済的な格差のある国からの留学生が支障なく勉学に集中でき

る環境づくりは受入側の課題といえよう。

もう一つの問題は日本人の友人作りであった。サポートしてくれるはずのチューターに恵まれず、日本人と同じ授業をとっても授業中だけの関係に留まり友人関係には発展しなかった。国際交流サークルでも日本人学生は欧米人と英語で話したが、あまり交流できなかった。その結果、留学前に聞いた「日本人は冷たい」という印象を書き換えられなかった。日本人側も多様な人々と共生するために自らの対人姿勢を振り返り、変えていく必要があるのではないだろうか。

しかし、これらの逆境でさえ、Aさんは「何でも自力でやったおかげで、日本語を使う機会が増え、日本語の上達に繋がり、現在の仕事も得られた」とポジティブに捉えている。経済的なことを考えて現在の仕事についたが、夢は日本語の教師になることである。そのため、大学卒業後も日本語学習への意欲を持ち続けている。就職後は使う日本語が限られ、話す機会や勉強する時間も減って日本語力の低下が心配だが、チャンスがあれば日本の大学院に進学したいと思っている。経済的な問題で勉強に集中できなかった経験を踏まえて、奨学金を得て留学したいと思っている。Aさんにとって、1年間の交換留学は現在の自分を支えるだけでなく、さらなる日本への関心と学習意欲を掻き立てる経験だったと言えるだろう。

3.2.1. インタビュー協力者 Bさんの略歴

協力者 Bさんはインドネシアの大学の日本語学科在籍中に1年間交換留学をした。大学卒業後1年間現地の日系企業で働いたが、調査時の1か月後に研究留学生として日本の大学院に留学することが決まっていた。

3.2.2. Bさんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

高校生の時、日本の漫画を読んだり、兄のパソコンで日本のドラマを見たりして面白いと思い、日本語に少し興味を持った。大学入試は専攻を3つ選ばなければならない制度であるため、英語、工学、日本語を選択し、合格した日本語学科に入学した。高校で日本語を勉強していなかったので不安だったが、友人もでき、授業にも慣れて楽しくなった。日本語学科の学生なので日本に行くべきだという考えはあったが、4年次に卒論のテーマで迷っている時先生の勧めもあって交換留学に応募した。B大学の奨学金のテストに受かり、留学することとなった。

《留学中の生活》

Bさんの留学前の不安は自身の日本語能力と人見知りの性格であった。

B： 不安は、やっぱり僕はずっと日本語の能力が自信がなくて、社交的なタイプの人間ではないので、人見知りで、話下手。ずっと感じてるので、なんか、日本に行ったら友達できるかなという不安、あります。

一方、留学への期待も「たくさん友達ができる」ということと日本語の上達であった。

B大学への交換留学は同じ大学からBさんも含めて6人いた上、B大学の所在地にはインドネシア人が多く、安心ではあったが「逆にちょっと残念だな」と思った。

来日時に、まず授業の取り方の違いに戸惑った。インドネシアではカリキュラムに沿って同学科の学生は全員同じ授業を受けるのに対して、日本では自分で取る授業を選択しなければならないのは大変だった。

生活面では、B大学では奨学金を受けている学生は寮には入れないことになっていたため、民間

アパートを借りる手続きも大変だった。健康保険のシステムや携帯電話の契約もチューターが助けてくれたものの難しかった。

Bさんは奨学金だけでは十分ではないという不安からアルバイトをしたいと考えていたが、最初は指導教員から勉強に集中するように言われ、諦めていた。しかし、留学生の友人の紹介でカフェでアルバイトを始め、そのことを指導教員に報告すると、意外にも認めてくれ、帰国までそのアルバイトを続けた。カフェに来るお客さんは外国人に理解があり、よく話しかけてくれたこともあって、アルバイトはおもしろく、いい経験になった。

留学中に留学生向けのスキープログラムや富士登山なども経験した。

《人間関係》

Bさんのチューターとの関係は良好で、次のようなエピソードを語った。

*： チューターさんとはどうだったんですか。

B： すごく仲はいい。あの、日本に行った時は炊飯器がやっぱり大事と思って。なかなか買うと値段が高かったので、最初の方はやっぱり節約したいので。奨学金をまだもらっていないので、で、チューターが「僕二つ持っているの」って。すごく優しくて。もらいました。助かりました。

B大学には留学生と日本人学生の交流サークルがあり、欧米の留学生が多かったが、日本人学生と日本語で交流する機会も持てた。

Bさんは人見知りの性格もあって期待したほど多くの日本人の友人はできなかったものの、今でも連絡を取り合う友人が数人できた。

留学生の友人では、ブラジル人の友人ができ、授業だけでなくアルバイトや筋トレなど、ほぼ毎日のように行動を共にした。たまたま二人で立ち寄った古着屋の店長と仲良くなり、海外に関心のある店長とはよく話した。

Bさんにとって留学中の最も印象に残った出来事は、日本人と留学生の友人が開いてくれたサプライズの誕生日会である。

B： たこ焼きパーティをやったんですけども、少し煙が出てて、韓国人の友達が少し目が痛かったというか、赤くなって、「昔もこういうことありますよ」って、薬を買いに行きます。日本人の友達と一緒にいったんですけども、帰った時にはケーキをくれたんですよ。「誕生日、おめでとう」と言われました。すごく感動しました。

インドネシアでは誕生日会をする習慣がないので初めての経験だった。同じアパートに住む留学生も一人ずつプレゼントをくれた。

Bさんは留学中の人間関係は全体として「よかったかなと思います」と振り返った。

《交換留学生としての学修》

Bさんは卒論提出を残すのみだった4年次終了時に交換留学をした。4年次は日本語の授業があまりなく、日本語を話す機会も少なかったため、留学時には忘れていたことも多かった。B大学での日本語の授業は一度学んだことを学びなおすという感じで、課題なども多くはなかった。自分の意欲の問題ではあるが、もっと勉強すればよかったという悔いが残っている。また、留学中に卒論も進めるつもりだったが、最初は図書館で文献にあたったり関連のある授業をとったりしたものの、実際には書けなかった。

留学中に日本語の上達を感じたのは、日本人学生向けの授業でインドネシアの友達がわからないところを教えることができた時や、最初は全然わからなかった日本人同士の話を「盗み聞き」して

わかった時などである。

《留学後の生活》

Bさんは帰国後1年かけて卒論をしあげ、卒業した。卒業後の就職活動で日本語学科の事務所で見つけた日系IT企業の面接を受け、就職した。

*： お仕事はどうか。楽しいですか。大変ですか。

B： 大変ですね。正直、大変です。でも、周りのスタッフはすごくいいスタッフなんで、楽しくできるんですけども、仕事自体は、大変だと思う。

Bさんが勤める支店には日本人スタッフはおらず、日本語ができるスタッフは2名だけで、税金や保険などに関しても二人でやらなくてはならない。専門用語が難しく、何が伝えたいのかわからず誤解が生じることも多い。日本との仕事上のやりとりは英語が多いが、日本のスタッフがわからないことがあったら日本語にすることがある。

*： 留学したことで、今の仕事に役にたっているなど思うようなことがありますか。

B： はい。やっぱり日本のスタッフと日常会話をしている時はやっぱり大きいと思います。専門用語的なものはプロジェクトに関して使うんですけども、ほぼ毎日普通の日常会話なので、やっぱり役に立ちました。

しかし、Bさんはこの会社を1年でやめて、調査時の1カ月後奨学金を得て日本の大学院に留学することが決まっていた。将来、教師になりたいと思っている。

B： 先生になりたいのは、人見知りで、自分が困っているから、あえて教えることを知りたくて。あとは先生になるきっかけは、また日本の映画を見て、えっと「ビリギャル」かな、あれを見て、先生っていいなと思って、先生になりたいと思いました。

教師を志望することと交換留学との関連については以下のように述べた。

B： (留学は) けっこう影響があると思います。なぜかというところ、教えるのが、もし経験がないと、教えるのがただ作り話みたいな感じなので、経験があるともっともっと説得力があるので、学生さんたちに「こういうことがあるんだ」ともっと正しく言えるのではないかと思います。

《留学を振り返って》

最後に、1年間の交換留学の評価を聞いた。

B： やっぱり楽しいことがたくさんあったんですけども、後悔のストーリーも結構ありますね。

*： 後悔。やればよかったこと、聞こうと思ってたんですけど。例えば、どういうことですか。

B： 例えば、筋トレは毎日しなくても大丈夫。日本をあちこち旅行したらいいなと思いました。で、自分の意思をあまり、周りがどう思ってるかはあまり気にせず、自分の道をまっすぐ行ったほうが良いと思いました。(中略) けっこう後悔しましたね。そういう時は楽しいけれども、やっぱり。留学した時やらなかったことは残念と思います。

3.2.3. Bさんの語りに関する考察

Bさんの語りは内省的である。Bさんは自分自身の「人見知り」の性格から友人作りが最も不安であったが、留学中の人間関係は全体としてはよかったと振り返っている。チューターにも恵まれ、期待していたほど多くはないにしても今でも連絡を取り合う関係が数人の日本人学生と築けた。行動を共にする留学生の友人もでき、その友人の紹介でアルバイトも経験できた。また、アルバイト

を通じて多くの日本人と接することもできたとし、古着屋の店長など社会人とも交流が持てた。勉強やアルバイトだけでなく、スキーや富士登山など日本にいるからこそその体験もでき、楽しい留学生活が送れたと評価している。

日本語の授業は一度学んだことが多く、課題も多くなかったので余裕があった。日本語についても、授業や生活の中で上達したと感じたし、留学経験は勤めている日系企業の日本人スタッフと交わす日常会話など、仕事にも役にたっていると感じている。

しかし、Bさんには後悔もあった。それは周りの目を気にして自分の意志が貫徹できなかったことである。周りに流されず、勉強ももっとできたはずだし、日本の各地への旅行など日本でしかできないことがもっとできたはずだという思いが残っている。

Bさんは会社を1年で辞めて、日本の大学院に進学することを決めた。Bさんも将来日本語の教師になりたいと思っており、奨学金を受けるための試験に挑戦し、合格した。教える上で日本という環境に身を置いて経験したことこそが説得力を持つと思っている。交換留学でやり残したことを今度はやりぬきたい。そんな思いを抱いて、調査時から1カ月後に日本の大学院に進学する。Bさんにとっても交換留学は次のステップへの動機づけとなる経験だったと言える。

3.3.1. インタビュー協力者 Cさんの略歴

協力者Cさんはインドネシアの大学の日本語学科2年終了時に約1年間のC大学に交換留学をした。大学卒業後フリーランスで通訳・翻訳をした後、現地の民間日本語学校で教鞭をとり、その後出身大学の大学院に入学した。大学院在学中に修士論文のデータ収集と論文執筆のため日本の財団の支援を得て3か月間A大学に留学した。調査時にはフリーランスで通訳・翻訳をしながら、大学院で研究を続け、日本の大学院への進学を目指していた。交換留学終了から約4年が経過していた。

3.3.2. Cさんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

Cさんは、子供の頃毎週日本のアニメを見ていて、日本に親近感を持っていた。親戚や友人の親に日本留学経験者がいて、自分も留学したいという気持ちを抱いた。高校の時よく見ていた日本のお笑い番組を通して、少し日本語がわかるようになった。進学校の高校では有名大学への進学が一般的であったが、通学の利便性や学費などを考えて出身地の国立大学で言語教育が充実している大学を選んだ。日本語を「最大限まで活かせると別の質になれる」と思い、入学後頑張って勉強し、留学前には日本語能力試験N2にも合格した。2年次終了後当時交換留学できる唯一の大学だったC大学に留学した。留学後奨学金がもらえることになった。

《留学中の生活》

Cさんは留学前「不安はまったくなかった」という。2年次終了時に交換留学生に選ばれることはなかなかないことなので誇らしかったし、「留学したい」という気持ちは何よりも勝っていた。

来日後まず直面したのが電気、水道等の手続きの難しさであった。留学生寮のチューターが新入留学生を集めて手続きをしていることを知り、一緒に済ませることができた。また、インドネシアでは固定されたカリキュラムであるため、自分で授業を選択しなければならないのは大変だった。

イスラム教徒であることで思わぬ問題や制約もあった。

C： ちょっとびっくりしたのは、節約してふりかけを買ったら、意外と豚肉がはいっていた。

社会体験としてアルバイトをしたいと思ったが、居酒屋などのお酒を出すところは抵抗があったし、ヒジャブを付けているのでアルバイト先の制約があった。パン屋で週3回朝6時半から11時までパンの成形をするアルバイトを見つけた。力仕事で大変だったが、勉強になった。

大学では日本語を使うことに重点を置き、周りから「やりすぎ」と思われるくらい積極的に授業に取り組んだが、じっくり勉強したのは寮であった。80%くらいの力を勉強に注いだと思う。

日本人学生、留学生、地域の人など徐々に出会いが増えて、誘われることも多くなった。また、奨学金のおかげで余裕もあったため、東京の大学院に進学した先輩を3か月に1回程度訪ねて大学院進学のための情報収集をしたり、A大学に留学している後輩のところに遊びに行ったりした。

*： 日常生活もけっこうアクティブだった。

C： そうですね。ほんとに1年間また来れるかどうかわからなかったので、今のチャンスをできるだけ使おうみたいなことにした。

《人間関係》

日本人学生をはじめ日本人の対人姿勢には冷たさを感じた。

C： 一番びっくりしたのは、やはり日本人の学生は冷たいことですかね。特に私、特別に髪を見せないし、みんなも抵抗あるんじゃないですかね。仲良くできた人は普通に仲良くして、一緒に授業にも出ますが、やはりたまにがん見されてて、またはちらちらされてて、いやとは思わないけど、話しかけるよみたいな気持ちになりますね、もしそこまで見たら。

専門科目の教員など外国人との接触の少ない日本人についても同様の印象を持った。

C： 留学生センターの先生はすごくサポートしてくれて、授業も楽しいし、みんなコミュニケーションがすらすらできます。でもやっぱり他の学部の授業をとると、やはり先生も異文化に関する興味もないので、ほんとに「ザ・日本の先生」のバージョンが出てる時「うあっ」てなってますかね。

しかし、徐々に友人関係を広げていくことができた。チューターとは初対面の時こそ「冷たさ」を感じたが、フェイスブックで同じアーティストが好きだということがわかり、距離が縮まった。C大学では大学主催のパーティなどに加えて、チューターをはじめ国際交流に関心がある学部生も参加できる学生主体のパーティやイベントが多く、交流の機会に恵まれていた。自分たちでも新たに毎週金曜日に一緒に食事をする「食事会」を行った。クラスメートだけでなく、寮での交流を通して多くの日本人学生、世界各国の留学生の友人ができた。これらの友人とは今でもSNSなどを通して繋がっている。チューターには再来日した際に空港まで迎えに来てもらい、数日間泊まらせてもらった。

インドネシアで教えた経験のある指導教員との関係は良好で一緒に外食するなどした。地域の人とも交流があり、周辺の観光地やお祭りにも連れて行ってもらい、今も連絡を取り合っている。ホームステイの家族とも連絡を取り合い、関係を維持している。

《交換留学生としての学修》

授業では先生に質問をしたり、コミュニケーションの練習はできたが、じっくり勉強できたのは寮であった。

C： メディアからの日本語を勉強するのが一番多かったんじゃないですかね、バラエティとか。(中略) または、私たち日本語学習者にとってはJLPTを一所懸命とらないといけないわけなんで、対策は学校じゃ物足りないと思うんで、自分で試験の前に三冊、二冊ぐらい本を終わらせて受けることによって完全に合格じゃないみたいな。

頑張ろうという気持ちの中には自分を「いじっていた友達」を見返したいという気持ちもあった。日本語の授業では来日したばかりの学期より次の学期のほうが簡単に感じたのは日本語が上達したからかもしれないと思う。しかし、上達が客観的に測れるのは日本語能力試験だと考え、留学中にN1に挑戦し、文法と聴解の力がついたことが確認できた。読解の点数が足りなかったが、帰国後再挑戦しN1に合格した。

Cさんは日本語の授業の他、単位互換ができる専門科目を選んで履修し、大変だったが単位を取得した。

《留学後の生活》

帰国後1学期はC大学で取れない科目の単位をとり、次の学期は実習と論文で、帰国後1年半で卒業した。卒業後フリーランスの通訳を始めた。会社の通訳より自分には合っていると思っていたが、親が心配したことやいやなこともあったため辞め、民間の日本語学校の教師をアルバイトとして始めた。1年半たった頃大学の先生に勧められて大学院に進学した。文部科学省の試験を受けて日本の大学院に留学したいと思っているが、親の許可が得られずインドネシアの大学院で勉強しながらチャンスを待つことにした。将来は大学で教えたいと考えている。

現在、大学院に通いながら再びフリーランスの通訳をしているが、以前とはちがひ、あるインドネシア人の通訳・翻訳担当者のような形で仕事を得ているので、不安はない。時間が自由で、翻訳については自宅のできるので研究と両立できている。

《留学を振り返って》

日本語や日本留学経験はCさんの人生において大きな位置を占めている。

C：日本語、自分の仕事になってますね。日本語じゃないと自分がどこから稼ぐっていうより、他の分野は自分得意じゃないです。できるとは思います。日本まで行って活かさないともったいないじゃないですか。なので、最大限に使おうと。(中略)8年間もかけて日本語と接して、人生の半分というか1/3になっているじゃないですか。

留学中勉強も頑張ったが、思い出されるのは勉強よりも「普通に楽しかった」ことである。その中でも人との出会いが印象深い。

C：チューターとの出会いですかね、広い人脈に出会うことが印象に残っていますかね。この人と会う時こんな感じだったんだけど、段々仲良くなって。一番印象に残ってるかなって。

Cさんは留学中の出会いについて次のように付け加えた。

C：ほんとに留学することによって、新しい経験だけではなく、新しい家族ができるような感じがしますね、私にとっては。家族の存在をすごく感じたですね。日本に行くと、ただの学び先だけではなく、そこにも私を待っている人がいますし、再会できるのがうれしい人もいますし。

最後に、1年間の交換留学をどう評価するかを聞いた。

C：できればお勧めしたいですかね。後輩にお勧めして。ここで最大限まで日本語を勉強していても、物足りない部分、絶対にありますので、自然さとか、ニュアンスとか、日本で学ばないといけないものとか、できないものもあって。日本語学科となると、できれば留学したほうがいいんじゃないですか。

就職の場面でもすごく自分のポイントになっていますし、最近の会社はできれば留学経験がある人みたいな条件も付けくわえて、ものすごく自分のvalueになってるんじゃないで

すかね。

留学中にやればよかったと思うのは通訳や先生の研究のアシスタントなど「ハードルの高いバイト」である。また、少子化のせいか大好きな子供と触れ合う機会が留学中ほとんどなかったことを残念に思っている。

3.3.3. Cさんの語りに関する考察

Cさんの語りから、Cさんの学習態度が常に挑戦的であることがわかる。大学入学時から日本語を「最大に活かせる」レベルを目指して勉強し、2年次で日本語能力試験N2に合格した。2年次終了時には上級生を抑えて交換留学生に選ばれた。

Cさんは自分で目標を定め、自分に必要な学習方法を選び、学習成果の評価も自ら決定できる自律的学習者であることが語りから読み取れる。留学中は、大学ではわからないことを質問する、授業で積極的に発言するなどそこでしかできないコミュニケーションに重点を置き、日本語能力試験の準備や理解力の向上にはネットなどを使って家で学習するという方法を選び、帰国後N1にも合格した。さらに、留学中に日本語の自然さやニュアンスなど日本に行かなければわからないものも学ぶことができた。加えて留学経験は就職でも評価されるので後輩にも勧めたいと高く評価している。

Cさんは、1年間というチャンスを最大限使いたいという気持ちから、留学中は勉強だけでなく、アルバイト、大学院進学の情報収集、旅行、ホームステイ、地域の人との交流などにも積極的に挑戦している。しかし、Cさんにとって、様々な経験の中で最も印象深いことは多くの人との出会いであった。一般的に日本人の対人姿勢は「冷たい」と感じるが、C大学では学生主体の交流イベントが多くあったため、それを通して多くの日本人の友人を得た。ホームステイの家族や地域住民ともよい関係を築き、世界各国の留学生と友達になれた。留学先で親しくなった人々とは今も連絡を取り合っていて、「新しい家族」のように思っている。Cさんの交換留学は留学期間中にできることに果敢に挑戦しつくした1年とも言えるだろう。

卒業後は日本語を活かせ、かつ自分に合う仕事を求めて、フリーランスの通訳・翻訳家、日本語教師、大学院進学と紆余曲折があったが、研究者となって大学で教えたいと考え、日本の大学院への進学を目指している。留学経験はもちろんのこと、大学入学から8年間勉強してきた日本語は自身の強みである。Cさんの語りからは、専門性を高め、さらなる高みを目指して挑戦し続けるプロ意識が感じられた。

4. 考察

本章では、3名の留学評価から読み取れる交換留学の意義について考察を加え、語りから浮かび上がった受入体制の問題点を検討する。

本研究の調査協力者3名は大学で日本語を主専攻とし、交換留学生として選抜された優秀な学生である。3名は子供の時から日本の漫画やドラマ、音楽に触れ、日本に親近感を持っていた。しかし、大学入学前は特に日本語に強い関心があったわけではなく、親や先生の助言もあって日本語学科を選んでいった。いずれも大学在学中に交換留学制度を利用して日本留学をした。現在、フリーランスの通訳・翻訳家、日系企業の社員として通訳業務にも携わるなど日本語を使う仕事に従事している。

経歴から見ると共通点が多い3名ではあるが、交換留学中の体験とその評価は、自身の性格、経済状況、出会った人々、大学の受入体制などのそれぞれが置かれた環境に影響を受けながら3人3様に展開していることが、ライフストーリーの語りを通して描出された。

しかし、日本語が主専攻である3名ともに交換留学の経験を有意義なものとして評価している。池田・八若(2017)の文系元留学生と同様に、日本滞在経験そのものに意義を感じ、日本に滞在しなければできないことから多くのものを吸収し、自信を得、視野を拡大していた。3名は大学卒業後日本語や留学経験を活かした仕事についており、その点でも評価が高い。さらに、就職後も学習への意欲を継続して持ち、日本の大学院への進学を希望している。3名にとって、交換留学は1年間という短い期間であるが、自信を得、自分に足りないものを認識し、大学院留学という次のステップへの動機を提供する場となっていた。日本語の上達という「専門性の深化」、「人間的成長」や「自信」、就職での評価などの「他者からの評価」と、短期間の留学であるが、田中(2014)で指摘されている留学成果との共通性が確認できた。

日本語専攻の学生は日本・日本語の専門家として日本の良き理解者となる人材である。さらに、将来理解者となる日本語学習者を育てる人材となる可能性も持っている。交換留学は留学生の人生において重要な意味を持つだけでなく、このような人材を育てるきっかけをつくる場となる意義深いプログラムと言えるだろう。

一方、3名の語りから、ホスト国である日本の留学生受入体制の問題点もいくつか判明した。まず、経済的支援の問題である。奨学金が得られなかったAさんと奨学金受給者の2名との間には留学中の経験に明らかな差異が見られた。Aさんは経済的な苦境に立ち向かい、成長への糧としたが、勉学の妨げになる状況には制度上の改善が求められる。BさんもCさんも奨学金受給者であるが、経験としてアルバイトをし、日本での貴重な体験として評価している。これらのことを踏まえ、受給者数や支給額の配分の仕方等を含めて交換留学生に対する奨学金制度の在り方を見直す必要があるのではないだろうか。

次に、来日時の手続き支援についてである。来日時の諸手続きの煩雑さについては本研究の3名だけでなく池田・八若(2017)の大学院留学生をはじめ多くの留学生から指摘されている。諸手続きの簡便化には時間を要するだろうが、手続きへの支援を個々のチューターに託すといった状況には改善の余地がある。手続きの煩雑さが自明のことであるなら、一時的な支援ボランティアを事前に募るなど集団での支援体制を構築するなどの対応が考えられる。

3点目は、日本人学生の友人作りの難しさの問題である。Cさんは友人を得たものの、一般的に日本人は「冷たい」と感じている。Aさんは日本人学生の関心が英語を話す欧米人に向いていると感じ、日本人との交流は難しかった。日本人学生の友人作りの難しさは有川(2016)、吉野(2017)でも指摘されている。有川は、インドネシア人学部留学生の日本人の友人作りの難しさについて、自国の体験に基づいた友人関係の認識とのずれが困惑や不信感を引き起こしていると分析している。これらのずれに関して留学生側の理解や適応を求めがちであるが、多文化との共生が求められつつある日本において日本人側も自らの対人姿勢の問題点を認識し、変えていく方策を考えるべきであろう。しかしながら、池田・八若(2016, 2017)の大学院生の場合はいずれも日本人学生の友人作りの問題に関する言及はなかった。友人作りについては留学期間や学部生特有の要因を探る必要もあるだろう。

5. おわりに

本研究では、日本の地方大学に交換留学をし、大学卒業後母国で働く日本語専攻のインドネシア人元留学生3名を対象にライフストーリー・インタビューを行い、交換留学の評価、留学中及び留学後の日本語学習・使用と留学評価の関連に焦点をあてて、分析を行った。その結果、自身の性格、経済状況、出会った人々、大学の受入体制などのそれぞれが置かれた環境によって異なる個別的な経験と評価が描出できた。また、3人の語りから、経済的支援や来日時の諸手続き支援、日本人の友人作りの難しさなどの受入体制の問題点も出てきたが、交換留学は日本語の上達だけでなく、自信を得、視野を広げ、現在の仕事にも繋がるものとして高く評価されていた。加えて大学院留学という次のステップへの動機を提供する場にもなっていた。

日本語専攻の学生にとって、交換留学は短期間であっても、専門性を高め、自己成長につながり、留学生の人生に強いインパクトを与える意義深い経験であることがわかった。また、正規生としての留学へと繋がる役割も果たしていることも判明した。

交換留学プログラムは必ずしも日本語専攻の学生を対象にしたものではない。多様なプログラムが提供され、様々な専攻の学生がこの制度を利用して日本に留学している。今後、日本語専攻以外の交換留学生の留学成果についての調査も行い、交換留学プログラムの意義を検証し、プログラムの改善、開発の一助としていきたい。

付記

本研究は平成29年～平成32年度科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号17K02839, 研究代表者: 八若壽美子)による研究成果の一部である。

注

- 1) ライフストーリーとは「個人のライフ(人生、生涯、生活、生き方)についての口述の物語」であり、「個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つ」(桜井2012)である。
- 2) ここでいう「交換留学」とは、大学間交流協定を締結した大学間で相互に留学生を派遣・受け入れを行う留学制度である。学位取得を目的としない1年以内の短期留学で、協定に基づき授業料相互不徴収や単位互換などの制度が利用できる。
- 3) インタビュー項目:
 - ・留学前: 留学したいと思った動機やきっかけ/どうやって日本語を学んだか/○○大学を選んだ理由/留学前の不安・期待していたこと
 - ・留学中: 来日時の様子/期待していたこととの違い/留学生としての生活(勉学・日常生活・友人関係)/印象に残っているエピソード/先生・クラスメートとの関係/地域の人との交流/日本語学習について(授業中・授業外)/自身の日本語に対する意識/日本語上達の実感
 - ・帰国後: 国で就職することを決めた理由/仕事について/日本語に対する意識/仕事で留学経験が役に立ったこと
 - ・全体: 自身の日本留学経験をどう評価するか/やってよかったこと、やればよかったこと/現在の生活との関連
- 4) 「*:」は調査者の発言。

参考文献

- 有川友子 (2016) 『日本留学のエスノグラフィー インドネシア人留学生の20年』 大阪大学出版
- 池田庸子・八若壽美子 (2016) 「日本で働く元留学生のライフストーリーに見る留学評価」『茨城大学留学生センター紀要』 14, 49-66.
- 池田庸子・八若壽美子 (2017) 「元留学生のライフストーリーに見る留学評価―出身国の大学教員の場合―」『茨城大学留学生センター紀要』 15, 13-28.
- 川上郁雄他 (2011) 「『移動するこどもたち』は大学で日本語をどのように学んでいるのか―複数言語環境で成長した留学生・大学生の日本語ライフストーリーをもとに―」『早稲田教育評論』 25 (1), 57-69
- 三代順平 (2009) 「コミュニティへの参加の実感という日本語の学び―韓国人留学生のライフストーリー調査から」『早稲田日本語教育学』 6, 1-14.
- 桜井厚 (2012) 『ライフストーリー論』 弘文堂
- 佐藤正則 (2013) 「留学経験の意味と自己実現についての考察―元留学生のライフストーリーから」『早稲田大学日本語教育研究センター言語文化教育研究会』 11, 318-327.
- 田中京子 (2014). 「日本留学の長期的成果―第三国に住むラテンアメリカ出身者の場合」『名古屋大学国際教育交流センター紀要』 創刊号, 5-11.
- 吉野文 (2017) 「短期交換留学プログラム参加者に対するフォローアップ調査―日本語を専攻する中国の元交換留学生へのインタビュー調査―」『国際教育』 10, 49-63.